

『対立物の対話の法則』の下位概念としての『八割の法則』

学力研 下末 伸正

『学力研の広場』(二六二号)の全国大会
中学高校分科会のまともに『八〇点の油断』
があった。その実践的な内容については、
すでに『進路をひらく学力づくり』(子ども
の未来社 二〇〇三)で述べている。そこ
では、小学校教師や大人によって「やれば
できるんだから」とチャホヤされ、高々八
割(八〇点)程度で満足してしまった子が、
中学あるいは高校で転落していき姿を紹介
した。もう一つ、八割程度できるところか
ら勉強させると自主勉強を始め、成績に関
係なく、ぐんと伸びた子のことも述べた。
ぐんと伸びるとは飛躍的に伸びることであ
り卒業しても伸びることだ

に未整理だったからだ。三者三様のバラバ
ラに見える子どもたちを理論的にまとめ
くれたのは、ソクラテスの『知の無知』と
『無知の知』である。『知の無知』は、自分
は知っている・できると錯覚しており、無
知の世界を知らないが故に愚者であること
だ。『無知の知』は、自分には知らない世界
のあることをわかまえているが故に賢者で
あることを言う。『知』と『無知』は、有と
無や上と下と同じ《対立》《概念》である。
《》は哲学术語だ。《対立》については、《対
立物の統一と闘争》という法則がある。闘
争とは過激だが、ソクラテスの教えにした
がえば、『対立物の対話の法則』と言える。
八〇点台で慢心している子は、『知の無
知』の段階にあり、自主勉強をする必要が
なく伸びない。授業だけで百点を取る子も
その落とし穴がある。一方、八〇点より下
の子は、自分ができないことの自覚はある。

しかしたとえば八割が『無知』であれば途
方にくれる。一方、八割が『知』であれば
出来そうだと思う。そこが自主勉強への
分かれ道だ。九〇点台で『無知』を自覚し
ている子も同じだ。もう少しで百点であり、
言わなくても自主勉強をしていた。(したが
って『八〇点の油断』は『八割の法則』の
中に含まれると考えている)
分科会は『百点・完璧を目指す』とまと
めていた。そうではなく自主勉強という自
己《運動》をすることが大事だ。《対立》物
がそれを生み出す。高校生になった教え子
が『人生って不思議なものですな』と手紙
をくれた。よく勉強しよく本を読み帰宅の
遅い母にかわり夕食なども作っていた子だ。
『不思議』の背景には『無知の知』がある。
自主勉強は、『百点』という『知』の世界
をめざすのではなく、このように両者を対
話させるところにある。それが八割の『知』
と二割の『無知』で可能になった。三五年
かかったが、こうして岸本裕史さんの残し
た『自己教育運動』の課題を、実践的には
自主勉強として、理論的には『八割の法則』
として、一歩すすめることができた。